

失語症者に対し運転 支援を実施した1例

桔梗ヶ原病院 リハビリテーション部

須田広樹 佐藤理恵 野々村涼汰 松塚翔司 園原和樹

はじめに

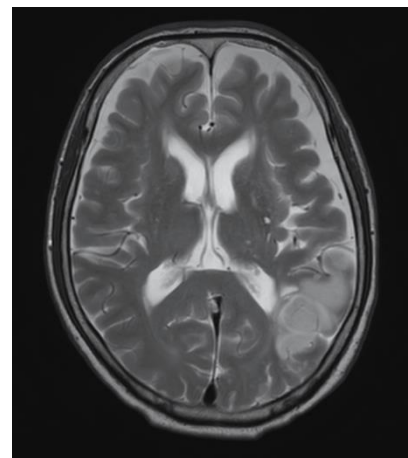
失語症の運転支援では、標識の認識不足や救護義務の責任が課題となってきた。

今回、ドライビングシュミレーター（以下、DS）の実施において標識の認識、救護義務には問題ないが、入力される言語情報によってハンドル操作やアクセル・ブレーキ操作、注意機能に変化を認められた症例を経験した為ここに報告する。

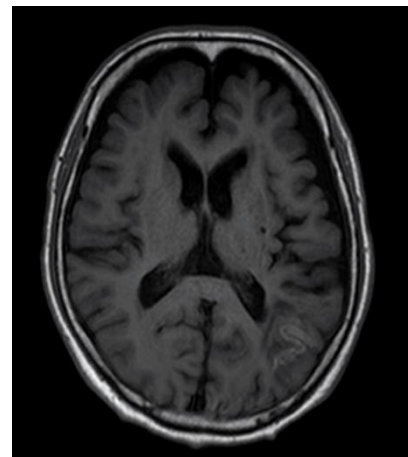
症例

60歳代、男性

現病歴：X年Y月左頸部内頸動脈狭窄に伴う脳梗塞によりA病院へ入院となり同月、頸動脈内膜剥離術を施行し、当院へ転院となる。転院時のHeadCT検査にて出血性梗塞を発見するが、症状の増悪はなく、麻痺の症状も認めない。



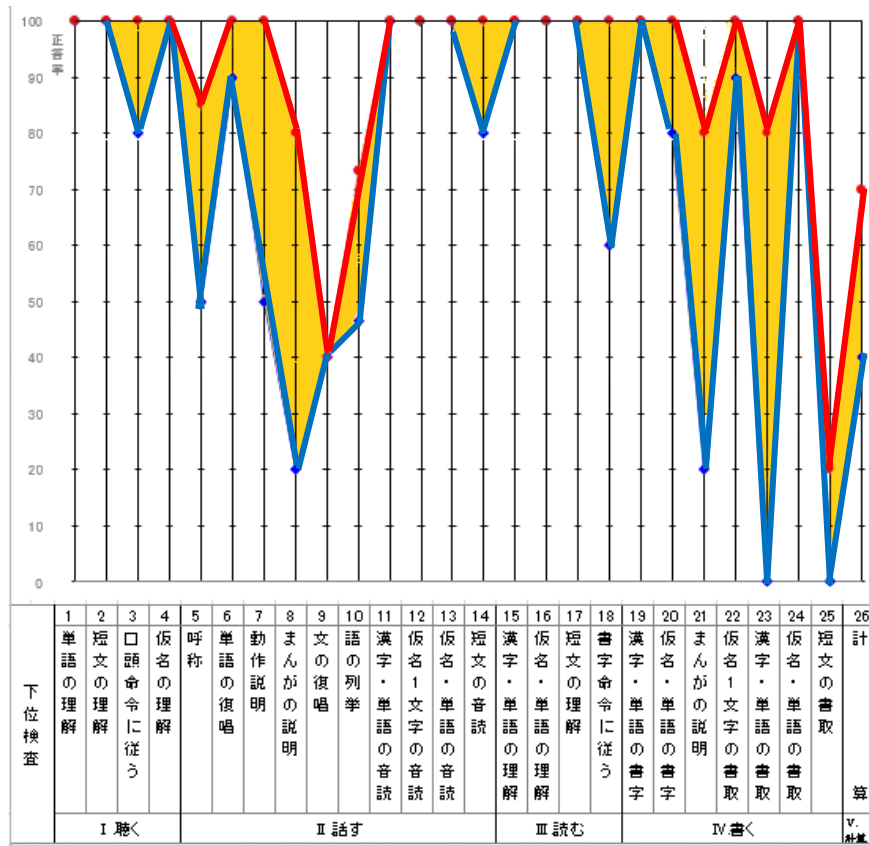
3病日目 (T2)



24病日目 (T1)

標準失語症検査結果

- +26病日後
- +181病日後



下位検査	1 単語の理解	2 短文の理解	3 口頭命令に従う	4 仮名の理解	5 呼称	6 単語の復唱	7 動作説明	8 まんがの説明	9 文の復唱	10 語の列挙	11 漢字・単語の音読	12 仮名1文字の音読	13 仮名・単語の音読	14 短文の音読	15 漢字・単語の理解	16 仮名・単語の理解	17 短文の理解	18 書字命令に従う	19 漢字・単語の書字	20 仮名・単語の書字	21 まんがの説明	22 仮名1文字の書取	23 漢字・単語の書取	24 仮名・単語の書取	25 短文の書取	26 計
	I 聴く				II 話す							III 読む				IV 書く				V 計算						

ドライブシュミレータでの特性

95病日目	声かけなし	声かけあり
操作	× (操作の遅れ)	× (操作の遅れ)
見落とし	× (信号の見落とし)	× (信号の見落とし)
聞き逃し 聞き誤り	× (反応の遅れ)	× (指示の聞き誤り)

ドライブシュミレータでの特性

156病日目	声かけなし	声かけあり
操作	○	○
見落とし	○	△ (時折ある)
聞き逃し 聞き誤り	○	○

常に声かけを行うと時に標識や信号の見落としがある

実車評価

実車評価ではDSの結果を受けて2パターンでの実施を行う。

①通常通りの手順で走行

教官による方向指示や走行時の注意点の指摘を行う

②意図的に声かけを増やして走行

走行時に実車評価とは無関係な話題を振り会話を増やしていく

実車評価

191病日目	声かけなし	声かけあり
操作	○	× (走行の停止あり)
見落とし	○	× (信号の見落とし)
聞き逃し 聞き誤り	○	× (左右指示の誤り)

**言語情報の増加により運転操作の乱れ、
注意機能の低下あり**

実車評価

- ・声かけの増加によって操作の停止や信号などの見落としの出現が確認された。
- ・しかし、声かけを増やしていない場面では、安全な走行が行えていた。

【運転再開の条件】

- ①同乗者と共に運転する
- ②慣れた道から開始する
- ③同乗者の声かけは最小限に留める
- ④ラジオ等オーディオ類の不使用

結語

失語症者に対して運転支援を行う場合、言語情報量によって注意機能の変化が生じる可能性が示唆された。

今後、失語症者に対する運転支援において、受ける言語情報量に応じて操作・注意機能などの評価が必要と考えた。